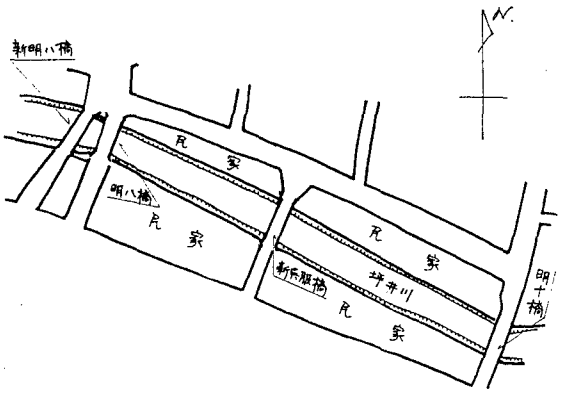
明八橋と明十橋における橋梁景観整備事業について

熊本大学大学院　学生員　○山下真樹　　熊本大学工学部　正　員　　小林一郎
熊本大学大学院　学生員　　柴田　久

1．はじめに　歴史的橋梁への新設橋の併設や拡幅は、これからの橋梁景観や周辺の都市景観を考える上で、非常に重要な問題となる。文献1)でも今後の橋梁の在り方を考える上で、都市空間への適合や歴史感覚の尊重、さらにはコミュニティとの融和などが設計と管理に求められると述べている。筆者らは、そのような観点から石橋の拡幅工事における景観設計について論じた[2]が、本稿では、熊本市内の坪井川に架かる歴史的橋梁である明八橋（写真－1）と明十橋（写真－2）という2つの都市内の石橋の橋梁景観整備事業について取り上げる。各々の橋の位置関係を図－1に示す。両橋は、長崎市内の石橋群を除くと都市内の石橋としては極めて貴重であり、歴史的橋梁の景観整備を考える際に示唆に富んだ事例となるものと考える。



図－1　坪井川に架かる橋梁の位置関係

2．明八橋と明十橋における橋梁景観整備事業

2.1 明八橋における橋梁景観整備　図－1からもわかるように、交通問題の解決策として明八橋の隣りにコンクリート桁橋の新明八橋が併設された。新明八橋の架設にともなって、現在、明八橋は歩行者専用橋として供用されている。

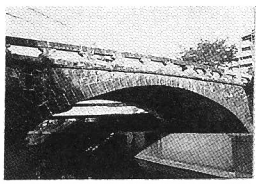
新橋の併設では、明八橋が明治8年作の歴史的橋梁であることやこの地区が現在でも江戸時代から続く古い商店街であることなどから、坪井川の歴史性が考慮され、歴史的橋梁をより良く見せるための試みがなされている。その実施例としては、新橋の高欄のデザインが挙げられる。写真－3のような随兵行列の様子を表した鋳物の高欄や写真－4のような加藤清正の朝鮮出兵の際の槍をモチーフにした高欄が採用されている。また、明八橋を眺めるための視点場として、新橋ではバルコニーが設置された。バルコニー上の高欄には、江戸期の庶民の様子を描いたプレートが設置されている（写真－5）。

また、写真－6からもわかるように、橋詰に木が植えられていたり、ベンチや水飲み場、車止めが置かれ、一種のポケットパークが橋の両側に設置されていることなどから、本整備では明八橋に「住民の憩いの場」としての性格を持たせようとしたことが想像される。

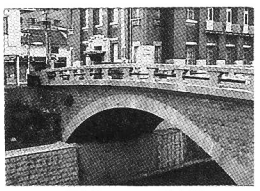
2.2 明八橋の景観整備の問題点　まず、河川景観における歴史性の表現として取り上げた高欄のデザインであるが、江戸時代の坪井川一帯の庶民の様子を表したプレート、随兵行列や槍などの安土桃山時代のモチーフなど、何の歴史性なのかが判然としない。また、写真－7でもわかるように歴史的な橋を見せるためのバルコニーから明八橋全体を見ることは出来ない。また、明八橋を歩道として利用することが多いため、新明八橋における明八橋側の歩道は通行量が少ない。そのため、バルコニー自体の意味が希薄であると言える。

また、明八橋の橋面の眺めは、石材が敷き詰められるなどの景観的な配慮も見られ、近景における特異点とも言うべき素晴らしい眺めであると感じられる。しかし、先に述べたように橋詰が公園化しているため、歩行者のスムーズな動きが妨げられている。そのため、本来の歩道橋として役割が半減しているように思われる。また、本橋の周辺には他者の視線を遮るものがなく、銀行の駐車場も隣接しているため直前まで車が進入してくることから、「憩いの場」としての空間特性は持ち合わせていないと言える。

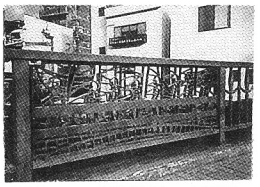
2.3 明十橋における橋梁景観整備　明十橋は主要道路上に位置するため、二車線を確保するために拡幅工事が行われた。本橋の景観整備では写真－8のように高欄に石製の重厚なものを採用したり、周辺の河川の護岸にも石張りが施されるなど、景観に配慮した整備がなされている。ただし、筆者らが文献2)において調査した結果と照らし合わせ、その拡幅工事が必ずしも良い結果であるとは言い切れない。写真－8からもわかるように現在の本橋では、歩道が全く確保されていない。本橋のような交通量の比較的多い橋梁の拡幅工事では、歩行者の通行を阻害しないためにもその拡幅工事において十分な歩道部の確保が望まれる。



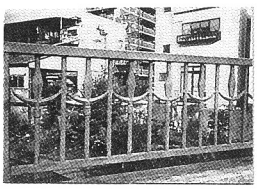
写真－１　明八橋



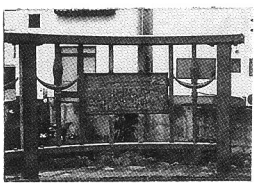
写真－２　明十橋



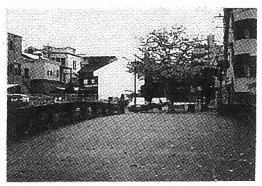
写真－３　新明八橋の高欄①



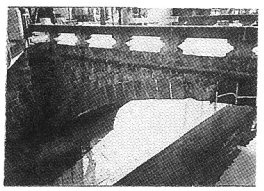
写真－４　新明八橋の高欄②



写真－５　新明八橋の高欄③

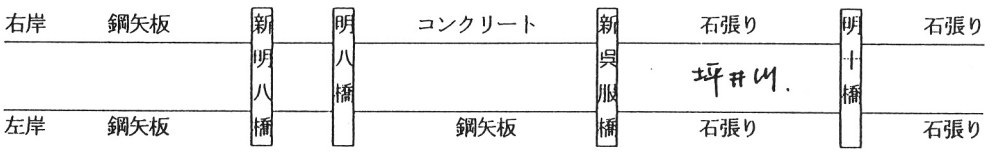


写真－６　明八橋の橋面の眺め



写真－７　バルコニーからの眺め

写真－８　明十橋の高欄



図－２　坪井川の護岸のテクスチャ

2.4 周辺景観全体の整備　明八橋と明十橋を取り巻く歴史的河川景観について、前報[3]で取り上げた「特異点」という視点から考えてみる。本稿において、筆者らが両橋の周辺を調査した結果、明十橋と明八橋の両橋の共通する特異点は全体を一望できる図－１の新呉服橋であることがわかった。その上で、全体の景観整備における問題点を指摘したい。

まず、最初の問題点として、明八橋から明十橋にかけての坪井川の護岸が不連続であるという点が挙げられる。新呉服橋からの眺めにおいて、明十橋から明八橋に至る護岸に着目すると、図－２のようにようにテクスチャが不連続であることがわかった。また、写真－１、２からもわかるように明八橋と明十橋の両橋のアーチの直ぐ下の部分の護岸では石張りが施してあり極めて不自然で安易な整備が行われていると言える。これらの統一性を欠いた護岸は、河川景観全体を見た場合に、風景の調和を乱す大きな要因となっている。

第二の問題点は視点場の整備不足が挙げられる。明八橋では先述のように新明八橋のバルコニーから全景を眺めることができない。明八橋近辺で橋全体を眺めることが出来る場所は、橋詰に隣接する民間の駐車場と護岸の上にしか存在しない。明八橋の橋詰をポケットパーク化するのであれば、隣接する駐車場の一部を借り受けるなどの努力も今後必要となるであろう。その際には「特異点」というより良い視点場を確保する意味からも、視線を一段下げて橋の側面が最も良く見えるように整備する必要があると考える。明十橋においても同様の視点場確保の努力が望まれる。また、貴重な視点場となる護岸上は、石張りがしてある明十橋－新呉服橋間ではごつごつとしていて歩きにくいことなどから橋の下におりていく人は皆無である。たとえば護岸上を遊歩道化するなど、住民の関心を河川景観に向けることによって、視点場の確保という課題の解決とともに橋梁の景観整備を含めたより良い河川景観を創出することが出来るのではないかと考える。

3．おわりに　本稿では、明八橋と明十橋という２つの歴史的な石橋の橋梁景観整備事業において、都市景観や河川景観との調和や歴史性の表現といった点でどのような試みがなされたかについて述べ、その問題点を指摘した。また、歴史的河川景観という観点から周辺景観全体の整備についても取り上げた。連続した河川景観の創造や視点場確保の努力が望まれる。

なお、本稿の執筆にあたりＫＡＢＳＥ「橋梁景観に関する分科会」の委員の皆様には貴重な御意見を戴きました。心より感謝いたします。

【参考文献】1)東京都：東京の橋と景観、1987.2)小林ほか：石橋の拡幅工事における景観設計、構造工学論文集 vol.44A, 1998.（印刷中）3)山下ほか：橋梁の景観設計への特異点の利用、平成８年度土木学会西部支部講演概要集、pp.48-49、1997.